

市民協働で目指す 「住みよさ日本一」のまちづくり

田園住宅都市として驚異的な急成長

守谷市は昨年、市制10周年の節目を迎えたばかりの若い都市である。ここ約30年間で人口が2万人台(旧守谷町時代)から6万人台にまで急成長し、今もなお人口増加が続く緑豊かな田園住宅都市だが、都市としてのその発展の「軌跡」は、単に急激かつ物理的な膨張現象によるものだけでなく、非常に綿密な都市基盤整備の計画とともに進められてきたのが大きな特徴だ。

そんな守谷市のこれまでの急成長ぶりを簡単に振り返ってみよう。

守谷の地には、利根川、鬼怒川、小貝川などの大河が現在の市域の周囲を挟み込むようにして流れており、その豊富な水資源を活用して近世以降、地域は主に農業地帯として栄えてきた。同時に江戸時代に流れを付け替えられた利根川や鬼怒川を活用する水(船)運の

拠点(河岸)として、近世には商業の面からも大いに発展したと伝えられる。その後、近代に至り、水運(商業)の全盛時代は、鉄道交通の発達によって急速にしぼんでいき、守谷の地は以後、基本的に農業地帯としての歩みが続くことになる。その基本構造が大きく動くのは昭和57年のことだ。

昭和30年代末につくば研究学園都市建設のプランが持ち上がり、同時につくば研究学園都市と東京の間に「田園住宅都市」を構築する計画が浮上する。それは後に4市町村にまたがる巨大な常総ニュータウン(戸建て中心)に結実していくが、その主要地区の一つとなった旧北相馬郡守谷町地区の常総ニュータウンが、昭和57年に街開きしたことで、それまで1万人台をずっと推移していた守谷町の人口が一気に2万人台へと倍増したのだ。

過密化する一方の東京23区への人口集中を分散する役割が課された数あるニュータウン計画の中でも、常総ニュータウン計画はつく

的に変わることになる。
「TXの開通や将来的な高速交通網の建設を想定して、また豊富な水資源の存在もあって、守谷地区は住宅地として単に人口急増現象が起きただけでなく、アサヒビールや明治乳業などの公害を出さない環境配慮型製造業の進出が顕著になるなど、地域産業の面からも構造が大きく変化していったのです」



全国から多数の参加者が訪れる守谷市の一大イベント「守谷ハーフマラソン」(毎年2月)

そう語るのは会田真一・守谷市長である。会田市長は旧守谷町時代を含め、現在まで6期連続で町長・市長を務めており(平成4年)、また父・会田源一郎氏は昭和43年～昭和53年まで守谷町長の職にあった。常総ニュータウン計画が持ち上がった時代から市制施行を挟み、TXの開通以後のさらなるまちの成長を首長として2代にわたり牽引してきただけに、近年の急成長への感慨はなおさら大きいだろう。

国内外で評価される守谷市の「住みよさ」

常総ニュータウンを契機に始まった守谷市における本格的な宅地開発の大きな特徴の一つは、近代以降、昭和30年代まで続いたほぼ純粋な農業地帯としての時代に、結果的に残された豊かな自然環境が、近年に至るまでいたずらな開発から奇跡的に逃れ、ほとんど損なわれることなく地域財産として残されていたことだろう。守谷地域の宅地開発や企業進出は、その地域財産を極力保持し、うまく生かす形で進められていく。

常総ニュータウンの建設計画の実施以降も、守谷市は常総地方の中核地に位置付けられていることから広域ごみ処理施設が建設され、人口10万人にも対処可能とされる下水道施設ができた。さらに市内の道路網や広域道路網も、将来の使い勝手を考慮しながら、計画的に建設が進められていく。

そうして市制が施行された平成14年には人口が5万人を突破。3年後の平成17年にはTXがいよいよ開通する。これによって秋葉原から守谷駅まで最短32分間で結ばれることになった。

TXは最終的に東京駅までの延伸が計画されているものの、まだ整備時期など具体化されていない。しかし、それまでは常磐線や関東鉄道を經由して、都心部まで(守谷→取手→上野)1時間半以上も掛かっていた。列車の本数もかなり限られていたというから、「劇的に便利になった」(会田市長)という表現は決して大きすぎない。



毎年6月に開催される「もりやアヤメ祭り」(四季の里公園)



あいだしんいち
会田真一
守谷市長

ば研究学園都市との絡み、つくばエクスプレス(以下、TX)建設との絡みなども相まって、計画人口9万人という規模の大きなものとなった。このニュータウン計画は全体的に見て、必ずしも計画通りに推移したとはいえないが、守谷市(旧守谷町)の都市としての基盤は、ニュータウン建設を契機に、決定



茨城県、東京芸大の連携事業「若手アーティスト育成、地域交流プログラム・アーカスプロジェクト」(守谷市生涯学習施設「もりや学びの里」にて開催)

団体の代表に勧められる形で、市として正式に参加しました。『誰にでも住み甲斐のある、緑の守谷市』をビジョンとし、1960年代以降に始まった大規模な宅地開発の経緯や、その間に推し進めてきた、農業中心の田園都市から近代的な都市機能と自然環境とのバランスを考えた田園住宅都市への転換を、民間団体の代表の方が中心となり、私も出席してさまざまなデータを駆使しつつ、プレゼンテーションしたのです(会田市長)

「今後は圏央道の全通が平成26年度から遅くとも27年度には実現します。そうなれば常磐自動車道も加えて、守谷市は全国を網羅する高速交通ネットワークの一部に組み込まれます。成田空港にも45分で結ばれることになる。ついこの間まで純粋な農業地帯に近い状態であったことを考えると、本当に夢のような話です(会田市長)

このように劇的な変化を遂げてなお、守谷市は、先ほどから述べているように、守谷市の宅地開発は計画的に、将来を見越した上で実施されてきた。人口10万人規模でも対処可能な下水処理施設や、市内・広域道路システムの充実ぶり、豊かな自然環境を損なわない形での開発などがその一例だが、それを端的に証明するのが経済誌主催の「住みよさランキング」などにおける高評価である。

さて、守谷市の特徴的な市街地を、実際に地図を片手に、縦横に歩いてみた。地図を手に眺めながら市域を縦横に歩いてみると、まちのかつての姿や、今まさに変わりゆく状況などが、目の当たりに納得させられた。守谷市の中心市街地は、現在、市域をほぼ東西に横断する関東鉄道常総線と、市域を南北に縦断するTXが交差する守谷駅周辺に構成されつつある。まず関東鉄道常総線に乗り、守谷駅から一つ目の南守谷駅で下車し、北に向かって歩き始めた。目指すは市民が設立した守谷市観光協会(作部屋義彦会長)が、市民ボランティアの協力で完成させたという、まさに手づくりの自然公園「守谷野鳥の森散策路」だ。守谷市観光協会制作の「茨城県守谷市 小さな旅のしおり」というガイドブックによると、この地域周辺はかつて水田として活用された後、耕作放棄地となって湿



リブコム国際賞2012におけるプレゼン風景(写真左は会田市長)

順調な増加率を示していた。それが一気に跳ね上がった主因がTXの開業によるのは明らかだが、先ほどから述べているように、守谷市の宅地開発は計画的に、将来を見越した上で実施されてきた。

守谷市は平成19年度から25年度まで7年間にわたり、経済誌が主催する全国自治体の「住みよさランキング」で常にベスト10以内にランクされてきた(平成20年度は総合1位)。同ランキングはインフラ整備から環境整備、教育環境整備なども含めた総合的な都市機能のランキングであり、守谷市の場合には特に公共下水道普及率(100%)、都市公園面積(人口比)、転入・転出人口比率、新設住宅着工数などで構成される「快適指数」において、常に全国のベスト3にランクされているのが注目される。

「両立」を実現している。ちなみに守谷市のこの「住みよさ」は、国際的にも高い評価を得ている。守谷市は昨年11月にアラブ首長国連邦(UAE)で開催された、環境に配慮したまちづくりの国際的コンテスト「リブコム住みよいまちづくり国際賞2012」(人口7万5000人以下部門)に参加し、見事、銀賞に輝いているのだ。



市民活動の拠点、市民活動支援センターで開催される「もりや市民大学」

誰もが住み甲斐のあるまちづくり

「リブコム国際賞へは、守谷市在住の民間

市の緑被率(空中写真などから測定した市域の緑の濃さ、比率)は62%を維持しているという事実も、リブコム国際賞では高く評価されたという。

首都圏の成長著しい住宅都市の中にあつて、しかも前述のような人口急増現象の中で62%の緑被率を保つ守谷市の事例は、緑化が重要事項の一つと位置付けられる近年の都市計画の世界において、専門家筋からの評価も非常に高い。リブコム国際賞の銀賞受賞は、それをも改めて証明するものといえるだろう。



毎年7月に開催される夏祭り(八坂神社)

ら徒歩10分ほどのこの地区では現在、人口5000人規模のまったく新しい新市街地「ビスタシティ守谷」(事業主体＝守谷市松並土地区画整理組合)の建設現場がある。

地区面積41・7ha、想定区画900区画、

計画人口5000人の土地区画整理事業は現在、住宅の建築が着々と進み、第1期の販売が間もなく始まる(全面完成は平成28年度中)。

守谷市の「低炭素まちづくりモデル地区」に指定される同事業は、全戸への太陽光発電シ



児童センターでのイベント「おとうさんといっしょ」

地帯化し、「現在では小動物の生息するビオトープ(有機的につながった多数の生物の生息環境)となった地域」だという。

南守谷駅から10分も歩くと、すぐに森の入口になる。中に入ると途端に、ホトトギスやウグイスなど野鳥の声が響いてくる。気温も市街地と2度から3度は違うのではないだろうか。体感温度では5度ぐらい違うようにも感じられた。

散策路は市民ボランティアや隣接する市立中学校の生徒たちにより結成された「野鳥の

森少年団」などの手によって整備され、日光や尾瀬など高原の湿地帯を行くような木道の景観が、縦横に展開している。これが市制施行前は「荒れ放題」でごみの不法投棄に悩まされていた森とはとても思えない。

「急激な宅地開発の中で、守谷市の自然環境が清潔な形で保持されている背景に、こうした市民協働による根強い努力が存在していることを、私は非常に誇りに思っています」(会田市長)

実際、守谷野鳥の森散策路のきめ細やかな整備ぶりは感動的なほどで、取材日は蒸し暑い日だったが、休憩をよく取りながら2時間ほどのゆったりとした散策で、かなり汗がひいた。

守谷市にはその緑豊かな環境と、高度な都市的集積とのバランスの良さに引かれ、引越してきた市民がたくさんいるという。市長の言葉にもあるように、「住みよさ」において国内外から高い評価を得ている守谷市の現状が、守谷市観光協会の会員に限らず、数多くの「まちを愛する市民たち」に支えられている部分が大いこの証しであろう。

完成間近「人口規模5000人の新市街地」

守谷野鳥の森散策路から西側に、TXの高架線路をくぐって30分ほど徒歩で移動すると、松並木が特徴的な「松並地区」に出る。TXならびに関東鉄道常総線・守谷駅からな

STEM導入、各戸の発電電力の売電を可能とするインフラ設備の導入、全面的な電線地中化など、非常に先進的な大規模宅地開発事業として各界の注目を集めている。

取材の折には住宅建設と併せ、江戸時代初期に旧守谷藩が植樹した貴重な松並木周辺の道路工事が行われていた。松並木は丁寧なフェンスで保護され、その風景がまた緑被率62%のラインを維持しようとする行政、民間企業の「総意」を見るようで実に心強かった。

守谷市では以上述べてきたような生活環境の拡充とともに「守谷市次世代育成支援対策に基づく各種の手厚い子育て・次世代育成



守谷駅西口広場で毎月第1日曜日に開催される「ふるさと都市もりや朝市」

支援施策を実施(会田市長)している。またALT全校配置による「話せる英語教育」の実施や保幼・小・中・高一貫教育体制実現への努力など、教育および福祉環境の拡充にも積極的に図っている。

それらも含め、守谷市のまちづくりのすべてのベクトルは「住みよさ日本一」の実現に向けてられている。それは例えば、市民協働でつくりあげた野鳥の森散策路や、すべてに意欲的な新市街地「ビスタシティ守谷」の工事現場を目の当たりにしただけでも、実に素直に納得されてくるのだった。

(取材・文 遠藤 隆)



多くの市民が参加する利根川左岸河川敷クリーン作戦の様相



市民が手づくりで完成させた「守谷野鳥の森散策路」



「守谷野鳥の森散策路」の建設中の様相